
ももいろうさぎ～うさぎは僕の仮面～

Misho

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ももいろうさぎ／うさぎは僕の仮面

【Nコード】

N6780Q

【作者名】

Misho

【あらすじ】

こんにちは。初です。

この話はヒーリングP様の『ももいろうさぎ』を元につくっております。

自分なりの解釈で書いておりますので、原曲様のイメージと異なってしまう可能性があります。

そして初投稿なのでうまくいくかはわかりません。

それでもよろしい方はどうぞ。

まずは原曲様を聴くことをお勧めします。

第一話くばくのおしごと（前書き）

この小説はもしかしたらグロテスクな描写が入ってくるかもです。

一応警告タグはいれておきますが、できる限りグロさは抑えようと思います。

と、というかホントに軽く入れるかんじにしようと思います。

自分が弱めにしたつもりでも読者の方の気分が悪くなったりするほどの

書き方をしてしまうかもしれません。

それでも大丈夫な方は進んでくださいませ。

第1話は大丈夫ですが2話は入ってくる予定です。

第一話　ぼくのおじい

ぼくはうさぎ。ももいろのうさぎ。

遊園地の人気者なんだ！

それは本当の姿じゃないよ。

みんなわかってるはずだよ。

本当はきぐるみを着た『人間』だってこと。

だけど子供の夢を壊したくないから。

みんなに…笑っていてほしいんだ。

あそこにいる子は迷子かな？

すごく泣いてる…

ぼくはそばに駆け寄った。

大丈夫、きっと見つかるよ。

だからもう泣かないで。

数分後…

その子の親が見つかった。

よかった。笑顔になったね。

もうお母さんから離れちゃだめだよ。

第二話　悲鳴は嫌い……（前書き）

グロ注入ほんのちよつと行きます。一応ご注意を…

第二話　悲鳴は嫌い…

夜の遊園地は人がだいぶ減る。

まだ親が見つからない子供が一人、ぼくのそばにいる。

とうとうその子は泣き始めた。

泣かないでよ。ねえ、泣かないで。

そしてとうとう閉園時間。

その子の親は見つからなかった。

だったらぼくの家においでよ。

そういつてその子をぼくの家連れて行った。

ぼくの家は真っ暗な裏道にある。

明るいネオン街から離れてここは海沿いの使われていない廃倉庫。

そこが僕の家なんだ。

暗くてじめじめしててとっても住みやすいし、なにより磯のきついにおいがたまらない。

そしてここは涼しくていい…

実は今、まだうさぎのままなんだ。

この子の夢は壊したくないからね。

倉庫の中は広くて、薄暗い明りがつく。

ここを何部屋かに分けて生活しているんだ。

「ここにいてね」

その子を一番奥の、磯のにおいが一番強くする部屋に入れた。

ぼくはまだうさぎのまま。

「ぎゃああああー！！！！！！」

その子の悲鳴が聞こえた。

ヤレヤレ、バレテシマッタカ…

ぼくはキッチンからよく切れるナイフを持ち出した。

ぼくはまだうさぎのまま。

その子のいる部屋の中へ。

ぼくの姿を見た途端、その子はうつすらと笑った。

ソウソウ、ソノカオガイチバンイイヨ…

その子はどうして笑ったんだろう…

そんなのはどうでもいい。

キミはぼくの秘密を見てしまったんだね…

ぼくはまだうさぎのまま。

さあ、もっと笑って…

その子がつこりと笑う。

ウンウン、サイコウダ。

ぐさり。

第二話　悲鳴は嫌い……（後書き）

子供が笑ったワケ、わからなくなっちゃうんで次は裏第二話にいたします。

第二話 どうして (前書き)

今回は第二話の裏話、子供目線になっております。子供はまだ幼稚園児くらいと私の脳内設定はそうになっておりますが、皆様の読みやすさを考えるとすべて平仮名表記というわけにはいきません。そこらへんご了承ください。あ、グロっぱいの注意です。

第二話 どうして

ぼくは今日遊園地にはお母さんと来てた。

ただどお母さんはトイレに行くって言うってぼくを売店に残していったまま戻ってこなかった。

1時間しても、2時間しても…

おかしいと思って外に出た。

いくらお母さんと呼んでも戻ってこない。

そのうちピンクのうさぎさんにあった。

『ぼくが一緒に探してあげる』

そう言ってくれた。

しかしそれからまた数時間たって…

外はすっかり真っ暗。もう閉園の時間だ。

そしたらうさぎさんの家に連れて行ってもらえることになった。

道は真っ暗で、なんだか怖かった。

ついていっちゃだめなんじゃないかなって思った。

ただどうさぎさんとてをつないでるから…

だんだん海のおいがしてくる。

『ここがぼくの家だよ』

そう言われてみたのは大きなボロボロの倉庫だった。

とりあえずうさぎさんに言われて中に入る。

倉庫の中は明かりがあるけど暗かった。

ぼくは奥の部屋にいてと言われて中に入った。

そこは海のおいの他になんかツンとする、鼻につくにおいがした。

本当に弱いけど…

ここはこの倉庫の中で一番暗いんじゃないか…

ぼくは部屋の中を歩き回った。

そして突然何かにつまずいた。

なんだろうと思ってぼくの足に引っ掛かったものを見る。

それは…ぼくと同じくらいの大きさの足だった。

まさか…と思ってそつとその足の本体を見つめた。

『……………ッ！！！！』

ぼくが目にしたのは、目を見開いて、首から血を流して…

なのに笑顔で息絶えた女の子の死体。

そばに同じような死体がいっぱいあった。

それを見たとき、ぼくは悲鳴をこらえることができなかった。

『ぎゃあああ————！！！！！！』

腰が抜けた。

走れない。

逃げられない。

ぼくはその場で丸まった。

うさぎさんの足音がする。

ぼくは涙をこらえて必死で笑顔を作った。

泣いたら一気に殺されるかもしれない。

だけと思いつき笑ったらこれも一気に殺されるかもしれない。

ぼくの服にはたくさんの死体から流れ出て、固まった血がこびりつく。

そして、うさぎさんが姿を見せた。

『あそぼっか。ひまでしょ?』

そう言われた。

正直、殺されると思った僕は安心しきってうさぎさんと夢中で遊んだ。

すごく楽しかった。

うさぎさんが

『もう遅いから寝ようか』

と言った。

ぼくはまた明日も遊ぼっねって言った。

…満面の笑みで。

ぐさっ。

第二話 どうして (後書き)

次は第三話になります。最初はちょっと今回の余韻が残ります。

第三話くぼくが好きなのは……（前書き）

前回の続きです。

最後にちよつと和やかさが戻るかもです。

第三話　ぼくが好きなのは…

ぼくはその子の腹を刺した。

できるだけ血が吹き出ないところを狙って…

けどやっぱり返り血はあびる。

「うう…」

その子が再び声を上げた。

顔には笑顔ではなく、悲痛な表情…

ぼくはこんな顔嫌いだよ。

子どもの”笑顔”が好きなんだ。

やっぱり笑顔の保存には『首元』が一番だね。

けどこの子をこのまま死なせるわけにはいかない。

なぜかって？

だって今のその子の表情は笑顔じゃなくて苦しみの顔…

そんな顔嫌いだよ。

だから１回、止血をする。

「…ぼくのこと…殺すんじゃないの…?」

その子が言った。

「気が変わったんだ」

嘘をついた。

その子は静かに

「そっか…」

と言って黙ってしまった。

何とか笑顔にしなきゃ…

なら…

第三話　ぼくが好きなのは……（後書き）

あんまり和やかじゃないかも。です。

第四話 もう一度（前書き）

特にコメントありません。と、いつとどどどど。

第四話　もう一度

「ねえ、キミが今したいことは何？」

そう聞いた。その子は

「…うさぎさんともっと遊びたい」

そう答えた。

ぼくは正直驚いた。

だって…

一瞬、闇ばかりのぼくの心に光がさした”気がした”

気のせいじゃないかもしれない。

ただわかるのは、ぼくの心に焼き付いている子どもの泣き顔。

それが見えてきた。

こんな記憶、過去においてきたはずなのに…

「…うさぎさん？」

その子の声で我に返った。

「そうだね。遊ぼっか」

そしてぼくたちは何もなかったかのように遊び始めた。

その子の顔がだんだんゆるんでいく。

ちよつとずつ、笑顔が見えてくる。

そして遊ぶこと数十分…

その子がまた満面の笑みを見せた。

今だ、そう思った僕はナイフに手をやった。

だけど、ぼくは一瞬とまどった。

…本当に殺していいのか、と。

ぼくは手元のナイフから手を離してその子の頬に触れた。

…まだやわらかくて、幼さを感じる肌。

遠いあの日、自分の手でじかに触ったやわらかい肌が思い出される。

けどぼくは、そのことを思い出してすぐにナイフでその子の首にぐさりとナイフを刺した。

血しぶきは嫌いだ。けどこのときはいいと思った。

たくさん、たくさん浴びたいと思った。

だからナイフを思いっきり抜いた。

その子の首から大量の血が噴き出す。

着ぐるみのからだにいっぱい血を浴びる。

その子はぼくの望みどおり、笑顔のままだった。

血が止まった後の顔が真っ青になったその子を見て、心に穴が開いた気がした。

第四話　もう一度（後書き）

ちよつと切なくなってきましたね。

次はうさぎの過去の話をしようと思います。

第五話 あのととき（前書き）

今回はうさぎさんの過去の話になります。

説明不十分だったらすみません。

あ、あと過去の話に出てくる蓮花^{れんか}とはうさぎさんの大切な女の子の名前です。

第五話　あるとき

その子の亡骸を見つめながらぼくは過去のことを思い出した。

蓮花：「ぼくの大事な女の子…いや、大事」だった」というのが正しいだろう。

蓮花はぼくの年の離れた妹。

ぼくは蓮花が生まれるまでお母さんと何事もなく暮らしていた。

ぼくのお父さんはいつの間にか帰ってこなくなった。

だからお母さんと暮らしてた。

ぼくもバイトができる歳だったのでたくさんバイトをした。

お母さんと二人で働いたから、二人きりの時間はたくさん増えた。

お父さんがいなくなり、二人で仕事を始めて数カ月。

お母さんが赤ちゃんを身ごもっているのを知った。

それを知った僕はさらに仕事を頑張った。

子どもが生まれたらもつとお金が必要だし、お母さんに無理させたくないし…

そしてある日、子どもは生まれた。

女の子…妹だ。

ぼくは仕事を終えてお母さんの病室に行った。

そこではくは信じられない出来事を目の当たりにした。

病室のドアを開けたとたんにする線香のにおい。

お母さんに…お母さんの顔に、白い布。

…何があつたのか、全くわからなかった。

近くにいた看護師さんに話を聞いた。

どうやら、妹を産み落とすと同時にお母さんは死んだらしい。

お母さんの最後の言葉は

「お兄ちゃん…この娘をよろしくね…」

だったそうだ。

だったらぼくは育ててやろっじゃないか。

この子を…蓮花を。

たった今名づけた。

この子は蓮花。

蓮の花…お母さんが一番好きだった花。

この花を立派に咲かせよう。

ぼくはそう決めた。

第五話 あのとぎ (後書き)

この話次回も続きます。

第六話　快感（前書き）

なんか昨日1回書いたんですけど…消えてしまったようです^^；

もう一回書かなきゃいけないのか…

あ、グロ注意です。

第六話　快感

蓮花はとてもきれいな女の子になった。

その分苦労も多かったようだ。

街を歩けばスカウトの嵐、学校では告白の嵐。

持ち物は盗まれてしょっちゅう新しいのを持っていつている。

そんな毎日が続くなかで、彼女の口数はどんどん減っていき、ついに口をきかなくなってしまった。

蓮花が喋らなくなってから3年、彼女は中学3年生の冬。

彼女がお母さんの写真を見て言った。

「…だれ？」

そつえばお母さんの事言っていなかったわけ。

「お母さんだよ」

「お母さん？」

「そう。ぼくたちのお母さん」

彼女は不思議そうな顔でぼくを見てくる。

「なんでいないの？」

「…蓮花を生む時に死んだから」

「え…」

彼女は少し驚いたようなような顔をした。

しかしすぐに頬を緩めてにつこりと笑った。

「なあんだ。事故とかじゃないんだ。ねえ、人間の死に顔ってどんななの？」

一瞬彼女が言ったことを信じたくなかった。

「ねえ、教えてよお兄ちゃん。見たんでしょ？お母さんの死に顔！」

無口な彼女からは想像できないくらいテンションが高い。

そして何より不思議なのは、彼女の無垢で純粋なイメージからは程遠い、

なんだか黒い、邪悪なオーラだ。

「っははは！すごい！すごいわ！こんなに身近に死に顔見た人間がいたなんて！」

彼女の眼は異常だ。

「そうだ！お兄ちゃんが私に死に顔を見せてよ！今私がお兄ちゃん

の事殺してあげるから！」

やばい、と思った。

しかしその時には彼女はナイフを手にして笑っていた。

そしてこっちに向かって突進してくる。

ザクッ！

刃物が何かに刺さった音がして、同時にぼたぼたと血が流れた。

第六話ゝ快感ゝ（後書き）

あんまりグロくなかったわ… ^^ ;

第七話　初めての～（前書き）

またグロいですよ。たぶん。

第七話　初めて

血が流れ落ちる音がまだ聞こえる。

「うう…っ」

血の持ち主は蓮花だ。

ぼくはあのと看、とつさにもう1本のナイフを手にして前に構えていた。

なので、横からナイフを突き刺そうとしていた蓮花の腹におもいきり突き刺さったのだ。

息が荒くなった蓮花はこんなにたくさんの血を流してもなおぼくを殺そうとする。

まずいと思ったぼくはさらに蓮花の腹にナイフを刺した。

ぼくがナイフを刺すたびに蓮花がうめき声をあげる。

思い切り叫びながら蓮花を刺していたぼくの口には鉄の味が広がり服には気持ち悪いくらいの血がつく。

そしてもう一度思い切りナイフを刺すと彼女はうごかなくなった。そう。

『死んだ』のだ。

ぼくの心は人を殺してしまった罪悪感と少しの快感に包まれた。

「は…っはははっ！」

さっきの蓮花みたいに思い切り声をあげて笑う。

ぼくの中から『罪悪感』が消えて『快感』が残る。

もっと…人を殺したい…

そんな欲にかられる。

だけど人を殺して、親族にばれたら逮捕される…

なら、身寄りのない人ならいいじゃない。

かといってこの辺にホームレスはいない。いいことだ。

なら、迷子の子を狙おう…

どこならたくさん迷子を捕獲できる？

そう、遊園地…

そこなら迷子の子供を連れていくことができる。

何かの皮をかぶれば血しぶきを浴びて服が体に張り付くこともない。

なら…それで行こう。

だから遊園地でうさぎをやっているんだ。

第七話　初めての～（後書き）

意味わかんなくなりましたね^^；

第八話ゝ笑顔ゝ（前書き）

過去のお話最後です。

第八話　笑顔

ぼくは計画通りに閉園まで身元不明の子どもをぼくが住んでる廃倉庫に連れ込み、殺す。

だけど何か物足りなさを感じた。

次の日、仕事をして気付いた。

足りないのは『笑顔』だと。

確かに、蓮花が死んだ時も彼女は笑っていた。

だけど子供を殺すときは悲鳴だけ。

…悲鳴は嫌い。

ぼくは子どもの笑顔が好きなんだ。

だから決めた。

子どもが最高の笑顔を見せた時に殺そうと。

だから、いきなり殺すのはやめようと。

たくさん遊んでから殺そうと。

そう決めた。

いま目の前に転がっている『その子』の死体もきれいな笑顔だ。

久しぶりにたくさんの血を浴びた。

いい気はしない。

だけど、ぼくに本気で向き合ってくれたから。

その子の記憶は自分にしっかり叩き込まなくちゃと思った。

だけど人殺しはやめられない。

第八話ゝ笑顔ゝ（後書き）

次回最終回です！

第九話 〱 新しい日々 (前書き)

最終回です！

第九話　新しい日々

あれからぼくはすっかり眠り込んでしまった。

朝起きると、なんだか体が軽かった。

きっちりうさぎの皮は脱いでいたから。

ぼくはうさぎの着ぐるみのスベアを持って遊園地へ。

『おはようございます』

仕事場につくといつも通りのあいさつをかわす。

そしてうさぎの皮をかぶって開園を待つ。

開園時間。

いつも通りの所定の位置へ。

いつも通り飛んだり跳ねたり…

するとまた迷子の子供を見つけた。

お母さんがすぐに迎えに来る。

良かったね。お母さんがいて…

離れちゃだめだよ。

閉園間際。

一人の子供がお母さんを探して泣いている。

だけど辺りに人気はない。

その子に声をかけた。

「ねえ……」

『ツギハキミガボクトアソボウ……』

また奥の部屋から聞こえる悲鳴

『きゃあああああああああ——————っ！——！！——！！——！！』

END

第九話　新しい日々（後書き）

ここまで見てくださった方、ありがとうございます。

日本語がうまく扱えてなくてしっくりこないところもありますし、

なによりとんでもない自己解釈で…

本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6780q/>

ももいろうさぎ～うさぎは僕の仮面～

2011年4月4日11時35分発行